

## 平成二十七年 度

## 一般入試① 問題(国語)

## 注 意 書 き

- ・ 試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・ 解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・ この冊子には問題が一ページから一九ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・ 解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・ 字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・ 解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

中学三年生の「僕」は、体育祭で緑組(四組)の応援団長を務めたが、後日、他の組の応援団長(大門・芹沢・川辺)たちの前で、チームがビリになった罰ゲームとして、グラウンドでトラック一周の逆立ちを始める。

気がついたら、ギャンリがさっきの三分の一くらい、十二人に減っている。そして、大門は芹沢と川辺と、サッカーボールを蹴っていた。

美鈴は、フェンスにひとりもたれて、まだ腕組みをしている。

たくさんのやつらに見られているよりも、今のほうが、恥ずかしさは少しだけ薄れるものだな。そう思ってから、ため息をついた。

1 どうして僕は、「恥」のセンサーがこんなに強いんだろう。

学校のなかのあらゆるところに、恥を生み出す地雷は落ちていて、僕はそれを踏まないように必死だった。

でも、同じように必死になつて人間は、そう多くはないみたいだ。たとえばクラスみんなの前で先生にどやされるなんて、自分には耐えられないのだが、他の男子は同じ目に遭つても、休み時間になると「先生、怒ると鼻の穴が猛烈に開くのな、へへ」なんて、むしろ面白がつている。

自分はプライドが無駄に高いのかもしれない、と思った時期もあった。でも僕は「カッコ悪い」ことは避けたくても、「カッコいい」ことには、そんなに興味はなかった。髪形は寝ぐせがついていなければOKだし、制服のしゃれた着こなしかたなんて、どうでもいい。理科の成績はクラスでおそらくトップだけれど、英語や数学と違って、その事実にはほとんど誰も気づいていない。でも、「気づけよー」とも思わない。

ともかく目立たないようにすること。地雷を回避する一番確実な方法はそれだった。大きな声を出さない。授業中に質問をしない。変わった文房具を持たない。たくさんの項目を実践してきたのに。

「おーい」

あの声は忠之だ。歩きながら手を振っている。七人のクラスメイトがついてくる。そのなかに慶一もいた。一番後ろから、ゆっくり歩いてくる。帰ろうとしていたのに、忠之が無理に引きとめたんじゃないだろうか。

「早くしろよー、おまえら」

と、忠之は牧羊犬のように彼らのまわりを回って、追い立てている。

せつかくギャンリが減ったところだったのに、忠之のやつ。あいつらを呼ぶために、いなくなつてたのかよ。迷惑でしかない。

そう思うのに、なぜかさつきみたい顔が熱くなることはなかった。むしろ、あの感覚に似ていた。小学校低学年のころ、かくれんぼをしていて、ほとんどみんな見つかったのに自分だけはまだで、「もしかして僕は忘れられたまま、次のゲームが始まるのではないか」とやきもきしているときに、ぱっと見つけられた瞬間。「なんだよー」と言いながらも、なぜか笑みか浮かんでしまう、不思議なあの感覚。

自分が思っているよりも、身体が疲れてきているのかもしれない。

僕は軍手をはめ直し、両手をついた。手を反らすだけで、じんと鈍い痛みが伝わってくる。それでも、彼らが来る前に、僕は足を上げて、一步、二歩、三歩、さつきよりも大きく踏み出した。背筋が痛いことに気づいて、顔をぐっと反らすのをやめた。ほぼ真下の地面。軍手のちよい先あたりを見ながら、進む。肘がかくんと、と抜けそうになって、落下した。

「あそこがスタートラインだったんだぜ。そこからぐるっと、回ってきたんだよ。ほら、もう半周だよ」

忠之がみんなに説明している。3 そうか、半周か。言われて気がついた。でも、これと同じ距離をあと半分、と言われると腕の筋肉がぶちぶち切れ始める気がする。それでも、再び足を上げる。

少し頭が痛くなってきた。血が上り、いや下がりすぎたせいだろうか。一步。また一步。肘と手首の間の筋肉は、なんていう名前なんだろう。そこがひきつれる感じだ。もしかぐつと力が抜けたら、顔から地面に落ちてしまう。

白原英子が、忠之に文句を言っている。

「でもさ、罰ゲームってあたしらが決めたわけじゃないんだから、関係なくない？ 団長同士で勝手にやっつてることですよ。なんで、応援しろとか強制されなきゃなんないわけ」

「いやだからさー、白原がもしじゃんけんに負けてたら、今ごろおまえが逆立ちしてたかもしれないだしさ」  
 「実際はじゃんけん負けてないんだから、ありもしない」もしも「はやめてよ」  
 けんけんけんけん、その声が耳にひびく。頭にもひびく。

「るせーな、黙れ。理屈女」

その声を聞いた瞬間、僕は手を動かすのを忘れて体重を移動させようとしたものだから、当然バランスを崩して、背中を  
 反らしながらブリッジするように足をついた。手首をひねらなくてよかった。

声の方向を見ると、もたれていたフェンスを離れた美鈴が、つかつかと英子の前まで来ていた。彼女は自分の首を、英子  
 の首だと思っっているかのように、左手でぎゅっと締め上げる。

「町平が負けたんじゃないよ、三年四組が負けたんだよ。わかんねーのかよ」

「意味……わかんない」

眼鏡をかけ直しながら、英子は小声で抵抗する。ケンカで劣勢の猫のように、背中が丸まっていた。美鈴が早口でまくし  
 たてる。

「体育祭の結果を思いだせよ。うちら緑組、ぶっちぎりのビリだぜ。もう午前中で結果、見えてただろうが。それでみん  
 なますます、やる気なくしてさ」

僕は口をぽかっと開けながら、アホ面<sup>アホ面</sup>で聞いていたけれど、誰にもその顔を見られずに済んだ。みんなも硬直したまま  
 ふたりの会話を聞いていたからだ。実は僕が一番ドキッとしたのは、ふたりの口論ではなくて、美鈴が「町平」と呼んでく  
 れたことだった。

クラスのやつらはみんなヒラマチと呼ぶ。中一<sup>中一</sup>のとき、間違えて逆さに読まれたことがあった。その間違えたやつが開き  
 直って、「別に町平でも平町でもあんま変わんなくね？」と言ったことから、あだ名はヒラマチになった。それが正しい名  
 字だと思ひこんでるやつさえいる。たぶん、大門とかはそうだろう。考えてみれば、僕の名前は、普段から逆立ちしてい  
 たってことだ。

でも、美鈴は今、ちゃんと呼んでくれた。彼女の話はまだ続いていた。

「あたし、卒業して中学のこと思い出すとき、三年四組のことは何も覚えてないんじゃないか、って最近不安なんだよ。  
 だって、何もないじゃん。みんなで頑張ったこととか」

「はあ？ それだったら、ここでヒラマチ応援しても意味なくない？ あいつひとり頑張ってることなんだから」

英子の声は相変わらずけんけん<sup>けんけん</sup>と喧しい。

「違う、それは違う」

美鈴がきつぱり言って、慶一がうなずいているのが見えた。

僕は頭痛がなくなったことに気づいた。美鈴によるショック療法。

二の腕をぎゅぎゅつと揉んでから、逆立ちをした。そして、十センチずつだけれど、地味に前へ向かい始めた。嘘みたい  
 だ。自分のことで女子ふたりが言い合いをするなんて。どちらとも、直接しゃべったことなんて数えるほどしかないのに。  
 ようし、と両手指を一杯広げて、バランスをとって進む。

肘がかくかくする。肩がやけどしているみたいに熱い。その熱さに耐えていると、まばたきを忘れて目が痛くなる。あま  
 り距離を伸ばせないまま地面に落ちた。それでも一メートル半進んだ。

(中略)

「やだ、雨だー。もう誰もあたしを止められないよー。教室帰る」

大きな声を出して、ばたばたと英子が走っていく。美鈴も早く建物に入らないと、風邪ひいちゃうぞ。心の中でそう語り  
 かけながら、前へ進んだ。

応援団長を決めたじゃんけんの日以来、朝、起きたときはまず美鈴の顔を思い浮かべて、寝る前に電気を消した後も、美  
 鈴の顔を思い浮かべるようになっていた。

でも、もちろん誰にも話していない。忠之にさえも。

もしも言えば、すぐに騒がれるだろう。「告白しろよ」「うまくいってもフラれても、すっきりするぞ」なんて言われて。

冗談じゃない。学校のなかの恥ずかしいことなかで、「告白すること」が僕にとってはもつともありえない罰だった。

この逆立ち一周よりもつと。

好きだという無防備さを人前にさらし、<sup>㊦</sup>「失恋」という話題をクラスメイトに提供するなんて。そんな恥をさらすんだったら、誰にも知られず、当然のことながら美鈴にも言わず、ただ遠くから見守っているのがいい。告白してフラれた数を武勇伝のように語っている男子が、僕には信じられない。

(中略)

軍手が地面にぬるつとめり込んだ。すっかり土と水分を吸いこんでいる。これじゃ、洗ったって泥はもう落ちなくて、忠之には返せない。新しいのを買って渡さなくては。

手を持ち上げて、十センチ先にべしゃつとつけたら、顔に泥のはねがかかった。目に入らなくてよかった。思わず、着地する。足もまたべしゃつと泥をはねた。白い靴のつま先が茶色に染まっている。振り返ると、さっきから三十メートルくらいしか進んでいない。これじゃ、下校時刻には間に合わない。

フェンスの向こう側を、ヘッドライトを灯した車がときおり行き来する。ホタルみいだ。

忠之、ごめん。軍手はないほうがいいかもしれない。僕は、それをトラックの内側へ、ぼいと放った。

「あたしが持つとくよ」

声が聞こえて、ぎよつとして振り返った。

「み、美鈴」

あまりに驚いて、頭のなかでいつも呼びかけているみたいに名前を呼んでしまった。ごくたまに、教室で直接話すときは「蓮見」と言っているのに。でも、そこを指摘することはなく、美鈴は黙って軍手を拾った。手を伸ばすと、ブレザーの袖から、水がたらたらと流れ落ちる。髪の毛からも、滴がしたたっている。細い首やほっぺたも濡れていた。

「何やってんだよ」

自分では叫んだつもりだったがけれど、声がかうまく出なくて、かすれてしまった。

「何って、見てるんだよ」

「風邪ひくだろ」

「そんなヤワにできてねーんだよ」

ヤワじゃないって言ったって、いくら男っぽい言葉遣いをしたって、おまえは女じゃねーかよ。と言ったら、ますます怒られそうなので、僕は、

<sup>9</sup>「ひとりでやりたいんだよ。見られると邪魔」

と、精一杯低い声を出した。

「るせーな。ひとりで勝手にやってる。あたしはひとりで勝手に見届ける義務があるんだよ」

義務ってなんだよ。

「それにほら」

美鈴は空を仰いだ。

「ほら、雨もやんできた」

そう言われて、僕も見上げた。灰色の雲は上空を過ぎたようだ。昼間だったら、虹が出たかもしれない。でも、秋分もとつくに過ぎている今、既に日は沈んでいる。フェンスの脇の街灯が、美鈴をてらす。雨に濡れたその顔は、神々しく光っている。

よくわからないけど、僕がやめない限り、美鈴は濡れた服を乾かせないんだ。風邪をひく。ならば、一刻も早く、一歩でも前へ。行かなくては。

(吉野万理子「時速47メートルの疾走」)

㊦ ギャラリー＝見物人。

そのなかに慶一もいた。学級委員である慶一が応援団長をじゃんけんで決めようとして提案したために、負けた「僕」が応援団長を務めることになった。

牧羊犬＝放牧中の羊の群れを導いたり、番をしったりする犬。 挙げ句＝結局。最後の最後に。 武勇伝＝勇ましい手がら話。

ヤワ＝弱く、こわれやすいさま。

問一——線部1「学校のなかのあらゆるところに、恥を生み出す地雷は落ちていて、僕はそれを踏まないように必死だった」とあるが、それはたとえほどのようにすることか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生に怒られないようにするために、悪ふざけをしている生徒とつき合わないようにする。

イ 学校ではカッコ悪いと思われなために、服装や髪形に神経をつかい、見た目を良くする。

ウ 成績で周りからあれこれ言われなために、理科以外でもよい成績を取るようになる。

エ 学校では目立たないようにするため、風変わりな文房具などはもってこないようにする。

問二——線部2「『なんだよ』』と言いなながらも、『不思議なあめ感覚』とあるが、この「感覚」はどういうことをあらわしているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見つけられてしまったという残念さよりも、かくれていた自分が忘れられていなかったといううれしさのほうが勝っているということ。

イ かくれていた場所がわかりにくかったことへの得意の気持ちよりも、そんな場所を発見した「オニ」への賞賛の気持ちが強いうこと。

ウ かくれていた場所がすぐに発見されてしまったくやしさと、そんな場所しか思いつかなかったという情けない気持ちがあるということ。

エ 自分が残っていることを忘れられたのではないかという不安もあるが、最後まで見つからなかったという満足感もあるということ。

問三——線部3「そうか、半周か。腕の筋肉がぶちぶち切れ始める気がする」とあるが、このように感じる「僕」の気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 応援してくれる人が減ってやる気を失いかけていたが、罰ゲームがあと半周で終わると思うと希望を感じ、疲れや痛みを克服して約束を果たす意欲を取り戻し始めている。

イ 疲れや痛みに負けず半周して自分なりに責任を果たしたと感じ、緊張感がゆるんで、罰ゲームを残り半周の途中でやめたとしても許してもらえらるだろうと考え始めている。

ウ 自力で半周し終えたことに気づいて少しほっとしたものの、残りの道のりがまだ半分もあることを思い、疲れや痛みで身体が限界を超えてしまっだろうと感じ始めている。

エ すでに半周していたことに驚く一方、たえがたい身体の疲れや痛みにだれも気づいてくれず、さらに半周させようとするのに対して、強い怒りがこみ上げてきている。

問四——線部4「ケンカで劣勢の猫のように、背中が丸まっていた」とあるが、ここから「英子」のどういう様子が読み取れるか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美鈴の批判的な言いはまちがいであると感じて、なんとか反論しようとしている。

イ 美鈴の発言の内容は正しいと自分もなっとくできるので、負けを認めてしよげ返っている。

ウ 美鈴の言葉は何かがちがうと感じて反発をおぼえるが、その勢いに押され気味になっている。

エ 美鈴の言っていることの意味がまったくわからないので、ただただ腹立たしく思っている。

問五 — 線部5「実は僕が一番ドキッとしたのは、（美鈴が『町平』と呼んでくれたことだった」とあるが、「僕」が「ドキッ」としたのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」がひそかに好意を抱いてきた美鈴が、「僕」のことをまちがった名前と呼んだりせずに、きちんと認めてくれていると感じたから。

イ 「僕」がひそかに好意を抱いてきた美鈴が、そっけない態度をとっていても、実は彼女も「僕」に好意を持ってくれていると感じたから。

ウ 「僕」に関心などなさそうだった美鈴が、クラスで無視されていた「僕」を見捨てず、気にとめてくれていることがわかったから。

エ 「僕」に関心などなさそうだった美鈴が、本名で呼んでほしいという「僕」の気持ちに真正面から応えてくれていることがわかったから。

問六 — 線部6「違う、それは違う」とあるが、美鈴は英子の言葉のどういう点に対し、どのように違うと考えて否定しているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 英子は、町平の逆立ちはクラスのみんなに相談なしに行われているので自分には関係ないと主張するのにに対し、美鈴は卒業までに思い出を作ろうというクラスの意見を代弁し、英子の考えを否定している。

イ 英子が、町平のやっている逆立ちを自分には関係ないと主張するのにに対し、美鈴はクラスみんながあきらめたことで体育祭に負けたのだから、クラスの一員として見届けるべきであると否定している。

ウ 英子が、町平は応援団長同士の勝手な取り決めに従って逆立ちをしているのだから、自分は関係ないというのに対し、美鈴は町平がしかたなしにやらされているのだから見届けるべきだと否定している。

エ 英子は、町平の逆立ちを見届けなければならぬという美鈴の思いを町平への好意とかん違いして自分には関係ないというのに対し、美鈴は英子のしつと心を感じ、その想像は間違いであると否定している。

問七 — 線部7「ようし、と両手指を目一杯広げて、バランスをとって進む」とあるが、このときの「僕」の気持ちの説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 英子をたしなめた美鈴の言葉により、自分一人でやるのではなくクラス全員が協力すべきだと気づき、くじけかけた気持ちを立て直すことができた。

イ 美鈴の激しい言葉を聞いて、逆立ちが体育祭の敗北で落ち込んだクラスのふんい気を良くするために必要だと気づき、最後までやりとげようと思った。

ウ 自分のことで真剣に言い合いをする美鈴を見て、みんなが注目している今、好意をよせている美鈴に良いところを見せなければとやる気が出てきた。

エ 美鈴と英子の口論を聞いて、一人ですませようと思っていた逆立ちはクラスみんなに関わることだと感じ、続けることに新たな意欲がわいてきた。

問八 — 線部8「『告白すること』が僕にとってはもったもありえない罰だった」とあるが、なぜ「僕」は「告白すること」が「ありえない罰」になると考えるのか。その理由を説明した次の文の空らんに入る適当なことばを、それぞれ指定の字数で答えなさい。

告白することは、（ A 三十字以上、四十字以内 ） してしまうことであり、それは、これまで「僕」が心がけてきた（ B 二十字以上、三十字以内 ） という自らの決まりを破る行いであるので、そのむくいとして最も恥ずかしい事態を招いてしまうことになるから。

問九 — 線部9 「ひとりりでやりたいんだよ。見られると邪魔」と、精一杯低い声を出した」とあるが、このときの「僕」の気持ちや態度の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美鈴が自分に好意を示してくれたことはうれしいのだが、彼女のことが気になって逆立ちに集中できないので、彼女を遠ざけようとして、無理やりすごんでいる。

イ 美鈴がそばで見えてくれたことはうれしいのだが、これ以上彼女を雨の中にいさせたくないのも、本心とは違う、そつ気ない言葉を、平静をよそおって言っている。

ウ 美鈴がこの罰ゲームに関わろうとしてくれてるのはありがたいのだが、この逆立ちは男が一人で成しとげるべきものであることを、彼女に何とか伝えようとしている。

エ 美鈴がそつと寄りそってくれていたことがうれしくて、好意をいだいている彼女の前でできるだけ自分がかつこよく見せようと思い、大人びた男を演じている。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

アメリカ人は、よほどセレンディピティ<sup>1</sup>ということが好きらしく、街の通りの名にしたり、喫茶店の名にしたりする。日本では一般になじみがうすく、少し知られるようになったのは、日本人のノーベル賞受賞者がテレビなどでした談話の中に出てきたのがきっかけである。もちろん科学の分野では以前からよく知られていたのだが、科学的教養の乏しい普通の人はいきいたこともなかった。きいても、わけがわからず、きき流しにしていたのであろう。科学用語ではないが、そう思っている人が少なくない。

辞書を見ると

セレンディピティ (serendipity) 思いがけないことを発見する能力。とくに科学分野で失敗が思わぬ大発見につながったときに使われる。セレンディピティ。【おとぎ話 The Three Princes of Serendip の主人公がこの能力をもっている】  
 とから、イギリスの作家H・ウォルポールの造語(大辞林)とある。ていねいな説明である。

この後半の部分をふくらませるところなる。一七五四年、文人、作家のホレス・ウォルポールは友人、マンにあてた手紙の中で、偶然思いがけない発見のことを、セレンディピティと命名した。セレンディップの三王子にちなむものである……と書いた。

『セレンディップの三人の王子』というおとぎ話が、そのころイギリスで流行していた。三王子はおもしろい才能(?)をもっていた。たえずものを見失う。それをさがすのだが、さがすものは出てこなくて、思いもかけぬものが飛び出してくるのである。それが一度や二度ではなく、何度も何度もおこった、という話である。

この探すものは出てこないのに、思いもかけなかったものが出てくる不思議に目をつけたところが手柄である。

セレンディップというのは、のちのセイロン<sup>B</sup>のことであり、いまはスリランカと呼ばれる国のこと。イギリスにとっては遠い東洋の国、不思議なことのおこる舞台<sup>A</sup>としてはうつつつけだつた。

2 科学者に好まれることは、作家のこしらえたものであるというところがおもしろい。

戦前の日本人を苦しめた結核はながく不治の病とされていたが、完治するようになったのはペニシリンのおかげでもある。

そのペニシリンがセレンディピティの産物であることはよく知られている。一九二八年、イギリスの生物学者A・フレミングがブドウ球菌を培養中、あやまって偶然アオカビが培地に<sup>a</sup>コンニユウしてしまった。ところがその周辺でブドウ球菌が消えていたことを見つけ、このアオカビ *Penicillium notatum* に<sup>a</sup>抗菌作用を示す物質のあることを発見、ペニシリンと命名した。実験中の失敗が偶然、大発見のひき金になった例は、その後、いくつもあり、科学者の間では耳新しいことではなくなっている。

一般の人にもわかりやすいセレンディピティの例として、イルカのことば、がある。<sup>3</sup>  
 冷戦時代のころのこと。アメリカの海軍では敵潜水艦の接近にそなえて、高性能の音波探知機の開発に忙殺<sup>④</sup>されていた。あるとき、音波がキャッチされた。スワ、某国の潜水艦か、と研究陣は色めきたった。しかし、探査してもそれらしき怪しいものがない。いろいろ調べていて、発信源はイルカであることが判明。イルカとイルカは音波によって交信しているらしいことがはじめて明らかにされた。

それまで、イルカが音波に当たるものを持ち、互いに交信しているなどということがわからなかったから、これは一大発見ということになった。  
 米海軍の研究はイルカの交信のためのものではなく敵潜対象であった。イルカの音をとらえたのはアヤマリであったが、それがこれまで知られなかったことを明らかにしたのである。セレンディピティである。

文科系の学問・研究は歴史学的方法によっている。過去のすぐれたものを次の世代に伝えるのが主たる役目である。当然、発見ということは少ない。発見しようと思つて、文学作品を読むのは異常である。正しく理解して、次の世代へ伝える。受け身である。自分の考えをあらわす機会はごく限られている。セレンディピティのおこる場がない。これは学芸文化の大きなハンディキャップと言わなくてはならない。文科系の分野でも、進化、進歩はあつてしかるべきである。

これからの時代、文科系の学芸にしても、進歩、進化がなくてはならない。どうしたら人文系のセレンディピティが可能になるのか。本書では、乱読によってそれが可能であると考ええる。

本を読むとき、二つの読み方がある。

ひとつは、本に書いてあることをなるべく正しく理解する読み方で、普通の読書はこれによっている。ひとの書いたものを正しく理解できるものかどうか、考える<sup>⑤</sup>と厄介なことになるのである。

百パーセントわかつたつもりの本も、実は本当にわかつているのは、七、八十パーセント。のこりの不明な部分は、<sup>⑥</sup>解<sup>か</sup>釈<sup>せ</sup>によって自分の考えて補填<sup>⑦</sup>しているのである。したがって、本を正しく読んだという場合でもかならず、自分のはたらくきで補充<sup>⑧</sup>した部分があるはずで、まったく解釈の余地のないものは、一ページも読むことはできない。

それはそうとして、普通の読書においては本にある知識、思想などは、ほぼ、そのまま読者の頭へ移る。それはいわば、物理的である。

5 自分の得意とする分野はこの物理的読書である。まったく未知のことはまず出てこない。

それに対して、乱読の本では、よくわからないところが多い。本の内容が、そのまま物理的に読者の頭の中へ入るとい<sup>⑨</sup>ことはまずない。わからないから、途中で放り出すかもしれないが、不思議なことに、<sup>⑩</sup>読みすてた本はいつまでも心に残る。感心して読んだ本なのに、読んだことも忘れてしまうことが少なくない。再び開いてみると、前に書き入れたことばがあつてユメのように思われるのである。

7 こういう乱読本は読むものに、<sup>⑪</sup>化学的影響<sup>あ</sup>を与える。全体としてはおもしろくなくても、部分的に化学反応をおこして熱くなる。発見のチャンスがある。

専門の本をいくら読んでも、知識はマすけれども、心をゆさぶられるような感動はまずない、といつてよい。それに対して、何気なく読んだ本につよく動かされるといふこともある。学校で勉強する教科書に感心したといふことは少ないが、かくれ読みした本から忘れられない感銘<sup>かんめい</sup>を受けることはありうる。

改まって読んだ本はどうもおもしろくないが、<sup>⑫</sup>立ち読みしたのがたまらなくおもしろく、買つてきて、読んでみると、さほどではない、ということもある。

どうも、人間は、少しあまのじゃく<sup>⑬</sup>に出来ているらしい。一生懸命<sup>けんめい</sup>ですることより、軽い気持ちですることの方が、うまく行くことがある。なによりおもしろい。このおもしろさというのが、<sup>⑭</sup>化学的<sup>けがく</sup>反応である。真剣<sup>まけん</sup>に立ち向かつていくのが、

物理的であるのとタイシヨウ的であるといつてよい。

化学的なことは、失敗が多い。しかし、その失敗の中に新しいことがひそんでいることがあって、それがセレンディピテイにつながることもある。昔から [ ] の功名、というが、セレンディピテイは失敗、間違いの功名である。

(外山滋比古『乱読のセレンディピテイ』)

㊦ ちなみに「〜に関係がある、〜による」ということ。 培養びよう微生物や細胞の一部を培地(人工的な環境)で育てること。

冷戦時代れいせんアメリカを中心とした諸国と、ソビエト連邦を中心とした諸国とが対立していた時代。

忙殺まいころ非常にいそがしいこと。 スワすわ突然のできごとにおどろいて発する語。そら。さあ。

人文じんぶん人間の文化に関する事。 厄介やくがいめんどうなこと。 あつかいに手数がかかりわずらわしいこと。

補填ほてん不足部分をおぎなうこと。 あまのじゃくあまのじゃく他人のいうこと・することに、わざと逆らう人。

問一 線部 a i e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部 A・B の本文中での意味として適当なものをそれぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 「なじみがうすく」

ア 好まれておらず      イ 活用されておらず      ウ 慣れ親しんでおらず      エ 理解されておらず

B 「うってつけだった」

ア まちがいでなかった      イ 思いもよらなかった      ウ おもしろかった      エ ぴったり合っていた

問三 線部 1 「セレンディピテイ」ということば」とあるが、「セレンディピテイ」の意味の説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思いがけないものが出てきたときに、それまで探していたものはどうなってしまったのか、というなぞを解き明かし、新しい発見をすることができること。

イ 探していたものを見つけ出すことにこだわり続けるよりも、予期していなかったものが出てきたことの方に着目し、それをすくい取ることができること。

ウ 出てきたものが探していたものでなかったことに気落ちすることなく、いつか必ずそれが見つかることを信じて、あきらめずに探し続けることができること。

エ 探していたのではないものが探すたびに出てくるという不思議なことがおこる場所に注目し、そこで思いもかけないものに出会うことができること。

問四 線部 2 「科学者に好まれることば」とあるが、「セレンディピテイ」という言葉が科学者に好まれるのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 科学者は、失敗することが必ず新たな発見につながると考えるから。

イ 科学者は、発見が人々の役に立てば立つほど価値が高いと考えるから。

ウ 科学者は、発見には新しい発想による研究こそが重要だと考えるから。

エ 科学者は、新たなものを発見することこそ価値があると考えているから。

問五 線部 3 「セレンディピテイの例として、イルカのことば、がある」とあるが、「イルカのことば」はなぜセレンディピテイの例と言えるのか。その理由を解答らんに合うように、四十文字以上、六十文字以内で答えなさい。

問六——線部4「セレンディピティのおこる場がない」とあるが、文科系の学問・研究においてセレンディピティがおこりにくいのはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文科系の学問・研究では、過去のすぐれたものを常に新しく解釈し直しながら未来に伝えることが重視されるため、今までの解釈を受けつごうという態度で研究することがほとんどないから。

イ 文科系の学問・研究では、過去のすぐれたものを正確に理解して次の世代に伝えることが重要であるとされるため、学問や研究の対象となるものの範囲がどうしても限定されてしまうから。

ウ 文科系の学問・研究では、過去のすぐれたものを正しくとらえて受けついでいくことが重んじられるため、今までにない発見をしようという気持ちで研究対象に取り組みことが少ないから。

エ 文科系の学問・研究では、過去のすぐれたものについて古い時代の理解をそのまま受けつぐことが大切にされるため、将来役に立つような新しいとらえ方をしようとする意識があまりないから。

問七——線部5「自分の得意とする分野はこの物理的読書である。まったく未知のことはまず出てこない」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読書する際に、自分が親しんでいて割とよくわかっている分野については、知識や考えなどが頭にすんなり入っていくし、解釈によって補って読んだりもするので、よく理解することができるといふこと。

イ 読書するということは、自分があまり読まない分野やよくわかっていない分野についても、深い知識や考えなどが得られるということなので、未知のことであっても自然に理解が進んでいくということ。

ウ 興味のある分野や理解できる分野の本はおもしろく読み進めることができるが、苦手な分野や理解できそうにない分野の本は、手に取る気さえわかないので、未知のものを読むことはないということ。

エ 本に書かれた内容をそのまま頭の中に移して読むような読み方をすれば、どのような本であっても正しく理解することができ、その際、頭に移すことのできない知識や考えなどはほとんどないということ。

問八——線部6「読みすてた本はいつまでも心に残る」とあるが、なぜそういうことがおこるのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 読みすてた本は、その内容が理解されないままではあっても、苦勞して読んだという思いは心にきざまれることになるから。

イ 読みすてた本は、その内容を何とか理解しようと自分の考えを書き入れたりしながら読んだものなので、記憶に残りやすいから。

ウ 読みすてた本は、その内容をよく理解できなくて読むのをやめてしまったことがくやまれて、忘れ去ることができなくなるから。

エ 読みすてた本は、その内容がよく理解できないからこそ心に引つかかって、それが心のどこかにとどまり続けることになるから。

問九——線部7「こういう乱読本は読むものに、化学的影響を与える」とあるが、それはどういうことを言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 途中で読むのをやめてしまうような理解しにくい本と、最後まで感心して読み終えるような理解しやすい本をまぜこぜにして読むと、相互作用により読み手の知識にいつそう深みが生まれることがあること。

イ どのようなことが書かれているか見当もつかないような本を読むと、その内容がよく分からないという未知の世界との出会いを経験し、好奇心が刺激されることで読み手の成長をうながすことがあること。

ウ ふだん読まない分野の本やたまたま出会った本などを読むと、その内容のすべてはよくわからなくても心を動かされ、それまでの知識や考えなどと反応し、新しい変化を読み手にもたらすことがあること。

エ 理解ができてできなくても、自分の好きな分野の本を次から次へとたくさん読んでいくことで、読みながら考える力や連想する力がきたえられたりして、読み手の発想が豊かになることがあること。

問十——線部8「立ち読みしたのがたまらなくおもしろく、——ということもある」とあるが、その説明として適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 立ち読みしているときにはその本の内容を理解しようとして読んでおり、気持ちが集中していて興味深い知識を得ることもできるが、買ってきて読むときにはその本を理解しようとする真剣さがうすれてしまい、おもしろさとして記憶に残るような知識は得られないこともあるということ。

イ 立ち読みしているときにはその本から知識を得ることにこだわっておらず、軽い気持ちで読みながらおもしろさを感じることもできるが、買ってきて読むときにははじめにその本の内容を理解しようとする読み方になり、おもしろさを感じにくくなってしまふこともあるということ。

ウ 立ち読みしているときには何気ない気持ちで読んでいるものであり、その読み方の中で興味のある部分だけが強く印象に残っていくものだが、買ってきて読むときには自分にとって興味のない部分も読むことになり、おもしろさを感じにくくなってしまふこともあるということ。

エ 立ち読みしているときにはその本の内容を理解しようとして読んでいてもわかりにくい点が多く、かえってその本に興味をそそられるが、買ってきて再び読むときにはその本の内容が頭の中で整理されやすくなるため、新たな発見のおもしろみが減ってしまうこともあるということ。

問十一 本文中の  に入る適当な言葉をひらがな一字で答えなさい。



